

『福翁自伝』を読む —日本の近代化と福澤諭吉— (その12)

2014. 7. 12

準備的考察：福澤諭吉が人生をかけて目指したもの—「一身の独立」による「一国の独立」—

1. 福澤が人生をかけて目指したものは二つある。一つは「半開」状態にある日本の「文明」化である。親の仇である門閥制度を打倒して自由・平等な市民社会を構築することである。もう一つは欧米列強の植民地支配に抗して日本の独立を勝ち取ることである。
2. 福澤は「半開」状態にある日本の人民に「縦型社会」の悪習をみた。「上」のものには卑屈になり、「下」だとみると横柄になって威張るのだ。封建社会での政府の圧政は、むしろ、このような悪習のなかにいる人民自らが招いている。福澤はそのような現実認識にたって、日本人民の「独立自尊」を求めたのだ。
3. 独立自尊した諸個人が織りなす「横型社会」にあっては男女間もまた対等であらねばならない。福澤は自分の子供を男女対等に育てているし、我々がよく知っているように、「多妻制」は許されず、「一夫一婦制」こそ人倫の根本である、と説いている。「自伝」にもその実践が語られている。
4. 「縦型社会」の悪習に染まりきった人民がその面目を改めるには社会全体の大変革がなければならない。幸い、日本は明治維新という大変革を経験した。もし、お隣の「支那」が人心を新たにし、国を文明に導こうとするならば、そして、もって「一国の独立」を図ろうとするならば、封建制度の中央政府が倒れることが必要である、と福澤は論じている。人心を改め、国を文明に導かない限り、「一国の独立」はない、これが福澤の確信するところなのである。
5. 福澤において「文明化」とは人民全体（「衆人」）の智徳の発展を意味する。智徳の発展とともに「衆人」が「独立自尊」を勝ち取っていくのだ。それでは、智徳の発展（文明化）→「独立自尊」を押し進めていく原動力は何か？「学問」である。それ故、福澤は「学問」をすすめたのである。学問に励めば富も地位も得られるし、「世のため人のため」に生きて人間の尊厳も発揮する事ができますよ、と。
6. 福澤は三回にわたる欧米視察旅行で、欧米近代文明の素晴らしさを感じ取るとともに、欧米列強の海外植民地支配の過酷さも痛感している。そして、欧米列強の植民地支配に抗して国の独立を勝ち取るには日本を欧米なみの文明国にしなければならないと悟に至っている。ここに福澤思想の原点がある。
7. 「一国の独立」は文明化にあり。それでは国の独立を約束する「文明化」とは具体的に何を意味しているのか。1. 表層：物質的文明化、2. 中層：政治的・経済的制度的文明化、3. 基層：精神の文明化、つまり、日本人民の「独立自尊」である。福澤はいうまでもなく精神の文明化を最優先した。それ故、福澤は次のように言うのである。「一身独立して一国独立す」と。
8. 福澤が目指した文明化による「日本の独立」は成功した。それどころか、その後、日本は欧米列強の真似をして、他国への侵略さえ始めている。それにたいして福澤が目指したもう一つの目標、つまり、「一身の独立」とそれに基づく英米型の「市民社会」の実現は夢と消えた。天皇制的絶対主義国家が出現してしまったのである。
9. 何故そうってしまったのか？それについては次回（その13）で詳論するが、今回は、その一つの理由についてのみ触れておきたい。そのひとつは、福澤が「自由民権運動」と距離を置いてしまったことにある。最初のうちは「自由民権運動」に共感するどころか、それを煽りたてていたのではあるが、福澤思想の危険性を鋭く嗅ぎつけたのは文部官僚井上毅である。幕末の尊王思想の流れを汲む彼とその一派は、福澤的近代国家の理念の、尊王思想的理念への転換を図っていく。その詳論は次回で。

『自信に則つて』

1. 「下」型「社会」之月「日本」の「衆人」は「相手を「上」だと思つて」「下」を「上」に「下」だと思つて」「横柄」に「威張る」。独立自尊は「衆人」の「封建社会」を「創り」たいと思つた「体戦」が「語られ」る。

往來の向うから来る百姓のやうな男に向て道を問たら、そのとき私の素振り如何が横風で、なかしの上族の正体が現われて、是も驚りか。など見える、するとその百姓が誠に一寸は道を教えて呉れてお辭儀をとりて行く、こりや面白と思ひ、自分の身を見れば持て居るもの、は軀軀一本きりで何にもない、も、成道で見ようと思つて、その次に来る奴に向て怒鳴り付け、「コリキ待て、向うに見える村は何と申す村だ、シラ村の家数は凡そ何軒ある、あの丸屋の大きな家は百姓か町人が、主人の名は何と申すなと、下らぬ事をたくみ掛けて上族丸出しの口調で尋ねると、其奴は道の間に小さくなくて恐れながら御答申上げますと云うやうな様子だ、此方はます／＼面白くなって、今度は逆で道で見ようと思ひ、又向うから来る奴に向て、「モシモシ押りながら一寸ものをお尋ね申しますと云うやうな口調に出掛けて、御答申す下らぬ回答を始め、私は大阪生れで又大阪にも久しく寄留して居たから、その時には大抵大阪の言葉も知て居たから、都て奴の調子に合せでゴソ／＼話をすると、奴は私を大阪の町人が御取にでも行く者と思つたが、中々横風でよくに会釈もせず、颯々と別れて行く、武で今度は又その次ぎの奴に横風をきめ込み、又その次ぎには上へ出掛け、一切先方の面色に取替なく誰でも唯向うから来る人間、匹ずつ、つ置きと極めて道で見た所が、凡そ、甲はかり歩く間、思ふ通りに成たが、ソコで私の心中は甚だ面白くない、如何にも是れは仕舞のない奴だな、誰も彼も小さくならなら小さくなら、横風ならは横風で可し、斯う何うも先方の人を見て自分の身を伸縮するやうな事では仕舞がない、推して知る、も地方小役人等の威張るのも無理はない、世間には封建政府と云う流があるが、是れは政府の月制ではない人民の方から仕制を招くのだ、之を何うして呉れようか、皆でまうと云て向より見捨てられる者でない、左ねはとて之を尋いで俄に教へようもない、如何に百十年来の余習とはないながら、無教育の上百姓が唯無闇に人に詫言ばかりなら守しいが、先き次第で驕傲になりたり、兵士になりたり、凡でコムの人形見らうな、如何にも頼もしくないと人に落胆したことがあるが、変れば変る世の中で、ソアこの節はそのコム人形も立派な国民と成てや向もすれば商工業も働き、兵士にすれば、命を軽んじて国の為めに水火にも飛込む、御答申、本で如何に上族の假色を使いても、之に恐ろしく者は全国、人もあるまい、是れぞ文明別化が賜でしよう。

2. 自づから子供に男女の差別はない。財産分配も平等に付した。

「ア、私も又私に九人の子供があるが、その九人の中に軽重愛憎と云ふことは良文、すともない。又四男五女のその男の子と女の子と違いのあらわさる訳でもない。田舎では男子が先ねると人目出度あり、女の子でも無病なれば先ず人目出度いなくて、日から軽重があるまいが、こんな馬鹿な事はない。娘の子なれば何が悪いが、私は九人の子軽重なしにかみなな娘たつて少しも嫉妬と思われぬ。唯今では男の子が四人、女の子が五人、新しい血縁に接分にはなつてゐると思つはかり、男女長少、腹の底から之を愛してゐるもほとんど分けてはない。……」

「九、六年前の事でした。九人の子供に分けて取て仕舞ふと申して、小供がワイノノ解て、その品を九に分けて、ソレを籤で取て、今では皆小供が路々に引受けて、家を出て居る者は家に持て行く者もあり、アタ私のこところの十歳の中に入れてあるのもある、と云うのが凡そ私の財産分配法で、如何にもその子に厚薄と云うものは、すともないのですから、小供の中に不平があつたらうて行かれた訳のものではないと思つて居ます。」

P. 361 S 3

庄六女へ向も討て寄、こたへる。「天一掃」倒さなければならぬ。『野島』の汁のつれぬ

奥平家の大奥に方違隠居と云ふ女隠居がある。この貴婦人は、橋家から奥平家に入つて来た由緒ある身分で、最早オオ平の老母でもあり、一家無上の御方様と崇められて居る。ソコで御津が先ずその御隠居様に対して色々西洋の話をする中に、彼の国には文字武備、富国強兵、医術も精しく、航海術も巧なり、その中には随分日本の風俗習慣に違ふ事も数々ありますが、後に西洋流夜に不思議なるは男女の間柄で、男女相対に軽重なく、如何なる身分の人でも、夫、婦に依つて居ます、是れ夫は西洋の特色で御座ると云う所を述べた所か、その御隠居様も若い時には直接に身に覚えがある。この話を聞いて心を動かさずには居られない。唇を豁然、発明した様子で、ソレから福澤を走つける氣になつて、次第々々に奥向の方に出入の道が開けて、御隠居様を始め、御上通りの人に逢つて見れば、福澤の外直も唯の人間で、角も生えて居なければ居凡のある者でもない、を極端かな人間だと云う所からして、段々懇親になつたと云うその話は、隠居後に内々御津から聞きました。ソレ見ると、夫、婦の両も隠然の中には随分男力のあるもので、既では今の世に多量の愚昧を除いて文明風にするなかと論ずるは野暮なと云うような説があるけれども、畢竟眞實性の苦しい道は口上で取るに足らない。夫、婦の正論決して野暮でない、世間の多教は同日夜で、殊に上流の婦人は悉く此方の味方であるから、私の身がこの先き何時まで生きて居るか知らぬけれども、有らぬ限りの力を尽して、前後左右を顧みずトクな奴を敵にしても構わぬ、多岐法を取替めて、少しやこの人間社会の表面な行てを見られるような氣になつて置つて居ます。」

P. 368 S 370

運動に福沢は可能性をみることを怠らなかつた。その理由は、福沢思想の危険性を見抜き、それを阻止しようとする動き、天皇制を維持する動きに気がつかないが、無観心にてのことである。その三謀者は井上馨、三上愛蔵、三上愛蔵の「考えるに違つて役人」である。井上馨の「明治十年の政変」の策動が、福沢思想に呼応されていく。(次回)

明治十年、西南の戦争が片付て後、世の中は静になって、人間が却て無事に苦しみ出すとき、私は不図思付て、見れば国会論を論じた人々に感ずる者もあろう、随分面白がるうと思ひ、ソレからその論議を起草して、マアその時には時事新報と云ふものはなかつたから、報知新聞の上筆藤田成吉、箕浦勝人にその草稿を見せて、この論議は新聞の社説として出されるなら出して見なさい、屹と新聞の人が悦ばない。併しこの草稿のままに印刷すると、文章の暗が見えて御座の事と云ふことが分るから、文章の趣意は無論、字句までも原稿の趣意にして、唯意味のない妨げにならぬ處をお明達の思ひ通りに直して、試みに出して御覧、世間で何と受けるか、面白いではないかと云ふと、年の若い九々の吉井藤田、箕浦から、大に悦んで草稿を持って来て、早速報知新聞の社説に載せました。当時、世の中にマア国会論の勢力のない時ですから、この社説が果して人気に授けらるや、又何でもない事になつて仕舞うから、御と見込みが付かぬ。凡そ、週刊ばかり何日のように社説欄内を廻つて、又藤田、箕浦が筆を加えて東京の同業者を煽動するようになつて、世間の形勢如何と見て居た所が、不思議なる哉、凡そ、一月を経つと、東京中中の諸新聞は無論、田舎の方にも段々紙が喧し、なつて来て、遂に任何の地方の有志者が国会開設請願なつて東京に出て来るような騒ぎになつて来たのは、世にもあはれ、又、マア、直して見れば、假令文明進歩の方向とは云いながら、直に自分の身に必要かなければ物教高等と云はねばならぬその物教富な政治論を吐て、図らずも人下の人騒ぎになつて、マア留めと云ふが、宿有秋の情野に自分が大に御座つて自分で有感するやうなものなと、少し怖くなりました。併し国会論の神は維新の時から時であつて、明治の初年に民選議院云々の説もあり、その後とて同様の干政を唱へた人も多い。ソレな事が深い水い原因に違ひはないけれども、不図した事で私が筆を執て、事の必要なる理由を論じて喋々嗚々敷くは、啻でなく、めつちやうに、世間がせた跡で、問もなく人下の輿論が一時に持上つて来たから、如何しても報知新聞の論議が一手と尊水になつて居ました。.....

.....報知新聞の一件ばかりでない、政治上に就て私の品行は都てこんな愚物人で、自分の身の私に利害はない所、諒察の考で、政府の地位を占めて自から政権を振廻わして人下の治權をしようとする前はないが、如何でもして国民一般を文明開化の門に入れて、この日本国を兵力の強い商売繁昌する大國にして見たいと計り、大に人本願で、自分且り自分の身に叶うだけのことをして、政界の人に交際すればして、誰に逢つても何と云はない、別段に頼むこともない、相談することもない、貧富苦樂、此れ分に安んじて居るから、考へるに違つて役人達が私の平生を見たり聞たりして変に思ふたのを決して無理でない、けれども貞丈に於て私は政府に對して少しも怨はない、役人達にも悪い人と思ふ者は、人もない、是れが封建門閥の時代に私の流儀にして居たらば、ソレソレ如何なる憂き目に逢つて居るか知れない、今日安全に存命を水として居るのは明治政府の法律の賜と思ひて喜んで居ます。